

市長賞

木元 優衣(きもと ゆい) 第四小 3年生

作品名:「生きるってすてきだね」を読んで

図書:生きるってすてきだね ―〈いのち〉の授業3年間の記録―

わたしが、この本を読もうと思ったきっかけは、「生きる事は大切だ」という事を、日じょう生活では考えていなかったけれど、生きる事がすてきだという事はどういう事だろうと、きょうみを持ったからです。

この本は、小学生がじゅぎょうで、実さいにしょうがいを持った人や、こんななじょうきょうにいる人たちの話を聞いて、その人たちの生き方や、気持ちや、どのように生活をしているのかを考えるお話です。

両親が早くになくなった人、事こで足をなくしてしまった人、指が一本しかない人、車いすにのっている人などが出てきます。その人たちは、生活をするのが大へんだと思いますが、みんなゆめを持って生きていたり、まわりの人たちの力をかりたりして毎日をせいっぱい生きています。

この本の内ようと同じようなお話をわたしの学校の校長先生がされていました。目のふ自ゆうなマラソンせん手が、ばん走者といっしょにさい後まで走りきり、パラリンピックにも出る事ができたというお話です。これは、さい後まであきらめずにゆめをおいかけたことと、まわりの人々のささえによってかなったゆめだと思います。

この本に出てくる人たちはみんな、「ゆめをあきらめなければ、ゆめはぜったいかなう」と話しています。わたしはこの言葉が大すきになりました。

わたしのゆめは、小学校の先生になる事です。これからわたしは、自分のゆめにむかってど力をして、くじけそうになった時にはこの言葉を思い出したいです。

それに、わたしのまわりには、ささえられている家族や友だちや先生がいることをわすれないで、その人たちにかんしゃをしていきたいです。また、まわりの人々がこまっている時には、自分がその人たちの力になりたいと思います。

この本を読み終わって、生きるという事は、目ひょうを持ってゆめをおいかけて、だれかのささえになったりするすてきな事だと思いました。しょうがいがあっ

でもなくても、いのちがあればだれでもすてきに生きられるのだと思いました。

わたしは、母が生んでくれた一つしかないいのちを大切にして生きていきたいです。そして、小学校の先生になるゆめをかなえて、たくさんの人に生きる事はすてきだという事をつたえたいです。